

日本核酸化学会誌創刊号(2017年11月14日公開)に  
寺正行研究員の研究論文が掲載されました  
(2018年11月30日)

1973年に核酸シンポジウムが発足しこれ以降毎年多くの優れた研究成果がこのシンポジウムより発信され、日本の核酸化学研究の発展に大きく貢献してきました。2005年からは海外の研究者も招いた国際核酸シンポジウムへと発展し、2017年に日本核酸化学会として学会移行しました。学会移行に伴い日本核酸化学会誌が創刊され、その第一号に寺正行研究員(構造生命科学研究部)の総合論文が掲載されました。

核酸高次構造の一種であるグアニン四重鎖はテロメア長の調節(=寿命)や転写、翻訳制御(=遺伝子制御)に関わっていることが知られていますが、その詳細なメカニズムについては依然として不明な点が多く残されています。寺研究員は今まで、天然有機化合物の骨格を利用してグアニン四重鎖を選択的に認識するプローブ分子の開発を行い、グアニン四重鎖検出法の開発、その結合様式の解明、さらにその結合様式を基盤としたturn-on型蛍光プローブの開発、を行ってきました。これらの業績の一部は日本核酸化学会の前身であるInternational symposium on Nucleic Acids Chemistry (ISNAC2015)において Outstanding oral presentation awardとして表彰されました。今回、寺研究員の今までのグアニン四重鎖に関する研究について総合論文として、日本核酸化学会誌創刊号(<http://www3.tagen.tohoku.ac.jp/~JSNAC/>)に掲載されました。

論文の [PDFはこちら](#) (本文を学会の許可を得て掲載)。